

一世二代かかつて子供の世界を壊してしまふ母があり、親の世界を全部だいなしにしている子供がある。兄をして世に出られないようにする弟があり、弟を苦しめぬく兄がある。

そうした場合多くは邪見がもとであり、我慢がもとである。世に邪見我慢ほど恐しいものはない。仏説のごとく、一切の悪は邪見一つの中にあると言つてもいい。

邪見の強い者は、私憤や、反逆心が強い。怒る時、人は邪見であり、邪見の人は怒りやすい。

だから邪見の人は、他人に怖れられる。聖賢を畏れるおそれなくて、虎狼を恐れる怖れでおそれられる。

なぜならば、たとい正しい心から忠告しても、その非が的に当つていればいるだけ、怒つて毒舌や権力や暴力で必ず仕返しをするからである。

邪見の人は必ず自分のほんとの相を忘れている。

自分につごうの悪い他人の欠点や不注意や過失はこれを厳しく責めて許さないが、自分のそうした悪に対しては、どんなことでも当然だと理屈をつけて言いわけして許してかかる。

こうした邪見な人は、弱い立場を持つ人たちが、その前でだけ、猫をかぶつてへつらつて、ぺこぺこ頭を下げたり、その甘心を買うことにつとめる。だが裏では必ずこの人の悪口を言い、呪いの眼を向ける。もし強い者であつたら、逃げてゆく。

我慢の強い人ほど、自分の勝手を正しいと信ずる。勝手な議論や言い分を通してやらないと、その現場が恐ろしいから、たいがいの人を避けて通す。彼は糞よけされているとは知らないで、ますます自分が勝れた者であるかのごとく信じて、いよいよ我慢になつてゆく。

滑稽よりもむしろ悲惨である。我慢な者のひとりよがり、だれ一人として彼の真の友にはなれない。彼の死後残るものは悪罵だけである。

かかる人は、何よりも自分一人の享楽や幸福を求めることが強い。彼のよい人とは、彼に快樂を与えてくれる人のことであり、彼の悪人とは、彼の欲望の邪魔する人である。彼にとっては人生とはただ本能的、感覺的欲望の満足である。

我慢強き人は、致命的な傷を与えるような言葉を平気でまき散らす。彼は、家庭や社会の暗の中心点であり、悪魔である。

昔、中国で家移りをする時、女房を忘れて行った人があった。

孔子様(?)はそれを聞いて「それはまだ何でもないことだ。桀紂はその身を忘れた」と仰せられた。夏の桀王や、殷の紂王は、自分一人の栄華のために重い税や、压制な刑罰などで言語に絶する悪政をしき、民に塗炭の苦しみをなめさせつつ、自分一人の幸福を求めた。彼は自己自身を忘れたのである。

自己を忘れた者は自己を滅ぼす。自己のみならず、家を他人を国家社会を滅ぼす。

「醜婦の百態は悉く醜」である。

彼には金を持たせても、地位を持たせても、学問を持たせても、子供を持たせても、貧乏させても、無学でおらせても、それらが皆彼を生かさないうで、鬼の金棒となる。がまんが先になっている以上は、百態悉く悪である。

この我慢がそのまま、仏教をもてあそびはじめると、恐るべき傲慢になりおわる。恐るべし恐るべし。

我慢なもののはけつして懺悔しない。

世には、安心のできる人物と、安心のできない人物がある。安心のできない人物にも、いろいろ種類があるが、我慢の人の安心できないことは、動物園の獅子と同じである。

高慢なるものは、けつして船底の火夫たろうとしない。彼はいつの場合でも、権力者としての地位を絶対に重んじ、悪質の英雄主義者となつて、必ずその身辺の弱者を犠牲にする。我慢邪見はけつして、下座を行じて人類に仕えようとはしない。

人生には呪いによらねば実現しない思想があり、合掌しなければ開かない法蔵がある。だが、邪見に鞭をあてて実現できる思想は、人類の怨敵であつても、人の世の光ではない。合掌の心によつてだけ人は真に一つになることができる。皆がとけて一つになり得るのは、彼岸から等流する信の世界においてであり、痛ましい闘争をつづけているのは邪見なる現実においてである。

人間世界では形よりも心が問題である。人を殺したということよりも、なにゆえに、どうして殺したかが問題である。そうして邪見が一番悪い心の相である。だから仏は、邪見の人は焦熱地獄に焼かれると説かれた。さらにそれが、一切の聖者を犯そうとするに至つては、尊き文化の華、道の人を滅ぼそうとするのであるから大焦熱地獄であり、さらに肉親の親や、仏をも滅ぼそうとする謗法五逆の邪見なる者は、無間地獄に墮在するものであると説かれた。

年をとった老人がある。結婚の日に持ち出される美は少しもないのに、これはまたなんとという崇高な美であろう。お念仏が口からもれ、その手が合掌している。久遠の本仏の聖容がチラチラとほの見える。しかもその人の口から「邪見な奴でございませう。」とささやかれていた。

内に観れば観るだけ邪見である。邪見を邪見と知った日に、そこに全く思いがけない声が届く。その声が届くのは、安らかな心になる。安心は邪見のなかにはない。如来の光明の中にのみ安らかさがある。

如来の光明は、衆生の上には、信心の智慧となる。よく邪見を克服するものはただこの智慧光のみである。如来の智慧光はそのまま大慈悲である。このお光のみ、我慢を転じて大信懺悔に導くものである。

邪見我慢は醜い。しかし内に省みる時、だれか邪見我慢なしと言えよう。だが人間のいかなる醜い邪悪をすらしを生かすのは如来である。如来の大慈悲の前に合掌してこの邪見我慢が懺悔の内容となる時、これあるがゆえに生まれる何ものかがある。う。「邪見傲慢悪衆生、信樂を受持すること甚だ以て難し」の聖訓を頂くべきである。